

## 「おせなかったボタン」 2 - (1) 礼儀

あさみは、アニメとパソコンが大好きだ。近頃あさみは、掲示板にこっている。今日も家に帰ると、さっそくパソコンのスイッチを入れた。

「あっ！来てる。来てる。」

昨日、掲示板に書いていたことへの返事が来ていた。思わずにっこりしてしまう。掲示板は、友だちやときには掲示板で知り合った人からも返事が来るのだ。それに、掲示板に書き込んだら、2～3分で返事が来ることもある。それで、ついつい掲示板でメールのやり取りをしていると時間がたってしまう、よくお母さんからおこられる。

ある日のこと、学校に行くと友だちのかなえから、

「たかこさんが、あさみて最低。むかつく。」

と言っていたことを教えてくれた。

「それ、ほんとうなの。」

あさみは、目の前がまっくらになった。たかことは、幼稚園から4年生までずっといっしょだったのだから、まさか、たかこがそんなことを言うわけない。

「なにかのまちがいじゃない。」

と言うと、かなえは、気のどくそうな顔をしながら、

「たかこさんにはっきり聞いてみたら。」

と言ってくれた。

今までも、けんかをしたことはある。でも、2～3日もするとだいたいどちらからともなくあやまって、もとのなかよしにもどるのである。だから、何度も、たかこにわけを聞こうと思うのだが、こわくてどうとう聞くことができなかった。

家に帰って、お母さんにも相談できない。その夜、いつものようにパソコンのスイッチを入れいつもの掲示板を開いた。だんだん、たかこへのいかりがこみ上げてきた。思わず、

たかこ！うざい！（><）

と文字を打ちこんでいた。書きこんだ悪口をみたときあさみは、はっとした・・・。

「これをたかこが、見たら・・・。でも、だれが書いたか分からないし・・・。」

あさみは、送信ボタンをおそうと思うが、今までのたかこの思い出が次々に目の前にかんてくる。

「たかこが、この掲示板をみたらきずつくらうなあ。」

それだけじゃない。掲示板はたくさんの人が見ているのだ。私だったらたえられない。やっぱり、ちゃんとたかこに聞こう。私にも悪いところがあるかもしれないし、ほんのちょっとしたごいかもしれない。あやはそう思いなおすと、悪口を消してパソコンの電源を落とし、たかこの家にむかった。